琉球ガラスの消長

田中　元

１．はじめに

琉球ガラスといえば、赤や青、黄色といったように実に色鮮やかで、沖縄のみやげ物としてふさわしく、また、すっかり沖縄のみやげ物として定着しているのではないかと思うが、いくつかの文献やホームページに目を通しているうちに、琉球ガラスが今日のように広く知られるようになった背景には、第二次世界大戦後、沖縄に駐留していた米軍兵たちが大きく関係しているということが分かった。

本稿では、琉球ガラスの歴史について述べ、琉球ガラスと米軍の関係を見ていくと共に､琉球ガラスの抱える問題や､琉球ガラスのこれからについても触れたいと思う。

２．琉球ガラスとは

琉球ガラスとは沖縄で生まれた伝統工芸のひとつで､その歴史はまだ100年ほどと、沖縄の伝統工芸の中では最も歴史が浅い。

現在では原料ガラスを材料として作ることが多いが、本来琉球ガラスは廃瓶などを再利用して作られていた。琉球ガラス製品には泡が入ったり、ひびが入ったりと、本来ガラス製品としては欠点となるところを、逆手にとってその特徴としている。

ひとつひとつ手作りなので同じものは二つとなく、また、材料には色つきの廃瓶を再利用しているために、製品にもその色が反映されるという点も、特徴といえる。沖縄を代表する、手作りのみやげ物として人気がある。

琉球ガラスはもともと各製造所の名前をとって、「○○ガラス」と呼ばれていたが、1985年に「琉球ガラス工芸協業組合」ができてからは、統一した名称として琉球ガラスと呼ばれるようになった。

３．琉球ガラスの歴史

３.１　沖縄におけるガラス製造の始まり

「ガラスが沖縄に入ってきたのは、おおよそ 1600 年代のことだということが推測できる」（高良 1989）が、実際に沖縄でガラス作りが始まったのは、明治の中期ごろのようである。明治以前の沖縄では、使われていたガラス製品のほとんどが日本本土からの輸入であったが、沖縄に運ばれて来るまでの船の中で、揺れなどのために製品の破損が多かったことから、長崎や大阪からガラス職人を呼んで、那覇西町にガラス工場を建てたことにより､沖縄におけるガラス製造の歴史が始まったと言われている。

「当時のガラス製品は､『ランプのほや』･『角形・丸形の駄菓子瓶』･『蠅取り器』･『漬物入れ』･『投薬瓶』･『石油壷』等であった。その製品は、北部や離島にまで出荷され、

需要はかなり大きかったようである。そこで問題となるのが、『ガラスの材料』である。破損したガラスが材料であったが、その屑ガラスも思うようにはなく、工場経営にとっては、何よりも、このガラス材料集めが難問だったようだ」（高良 1989）。

また、当時は材料としていたものが透明のものが主体であったため、できあがった製品も当然のことながら透明のものが主体だった。

３．２　第二次世界大戦後の琉球ガラスの盛栄

第二次世界大戦によって、沖縄におけるガラス製造は中断されていたが、これを再開したのは、戦前からのガラス職人たちであった。

戦後間もない頃の製品は、戦前のものとだいたい同じようなものだったが、戦後、琉球ガラスは沖縄に駐留していた米軍兵たちから注目されるようになり、彼らたちからの影響を受け、注文が入るようになると、琉球ガラスはその製品の種類を増やしたり、また材料にも変化があらわれるなど、大きく発展することとなる。

沖縄に駐留していた兵士たちは、自分たちのライフスタイルや好みに合ったものを求め、写真を持ってガラス工房まで来ていたというが、注文していたものは、パンチボールセット、水差し、デキャンター、魚などのオブジェだとか、装飾性の高いものだった。また、こういった彼らからの注文が、ガラス作りの技術の向上に貢献したという。

当時のことを知る、糸満市にある「琉球ガラス村」の職人の方に戦後のころの話を伺ったところ、その方が当時働いていた工房では、兵士の奥さんたちが大きな車（駐留兵士たちはみな裕福だったため、大きな車、外車に乗っていたという）に乗って製品を買いに来たという。彼女たちは、横柄な態度だとか、そういったことはなく、礼儀正しかったそうだ。私は、当時沖縄はアメリカの占領下だったために、駐留兵などのアメリカ人たちはみな、肩で風を切るように沖縄で生活していたと思っていたので、この話は意外に感じた。

また、彼らはぶどうだとか果物のオブジェのようなものをよく注文していたという。デザインがアメリカ人たちには受けたのではないかとおっしゃっていた。

現在でもアメリカ人の方が工房を訪れ、ガラス作りの体験をしにやって来るのだそうだ。私がそこを訪れたときも、白人の親子連れの姿を見ることができた。米軍の基地で働く、兵士の一家だったのかもしれない。

買い求める製品は、かつてのような装飾品を好むのではなく、食器だとか実用的なものを買っていくそうだ。

当時は、アメリカ人向けに作られた英文のカタログも作られており、私も那覇市伝統工芸館内にあるガラス工房、「奥原硝子製造所」で実際にこのカタログを目にすることができたが（写真１）、このカタログに載っていたものが当時人気があった製品だったという話を聞くことができた。そこには、実用するのに適したグラスといったものも掲載されていたが、装飾性の高い魚の形をしたオブジェだとか、確かに実際に使用

するには実用的とは言い難いが、見た目が美しいものが見受けられた。

また、ウェブサイト「名工が語る琉球ガラスの世界」には、「プラスチック製品の登場などによりガラスづくりは衰退するかに思われた 1950 年代の終わり、アメリカ軍人やその家族が工場を訪れるようになり、写真や現物を持ち込みガラス製品を注文するようになりました。ちょうどベトナム戦争（1960～1975 年）景気と重なり、本国への土産品として注文が殺到。アメリカ軍基地内の売店（Post Exchange）へ卸すだけでなく、英文カタログを作成して、ロサンゼルスやサンフランシスコなどに輸出するまでになりました」（http://www.wonder-okinawa.jp/009/history/history3.html）と、記されている。

このように、戦後は駐留兵士たちからの注文が相次ぐようになり、琉球ガラスは彼らから脚光を浴びることとなった。プラスチック製品の登場などによって、ガラス作りは衰退するかと思われたが、こういった事情があったために、琉球ガラスは衰退を免れることができたし、大きく発展していくことができた。

写真1　当時アメリカ人向けに作られていたカタログ

駐留兵や、その家族たちからの要望にこたえていくうちに、琉球ガラスは製品の種類も増え、デザインも変わっていったが、同時に材料も変化し、それにともない製品の色にも変化が現れた。

「琉球ガラスは、廃品としてのガラス瓶や屑ガラスを材料として使ってきたが、これは戦前も戦後もそれほど変わっていない」（高良 1989）が、やがて駐留兵たちが消

費するビールやコーラやウイスキーといった色つきの廃ビンが出回るようになり、これが琉球ガラスの材料として使われるようになった。ここにきて初めて、私たちが琉球ガラスと聞くと頭の中でイメージする、あの、色のついたガラスが登場することになる。このカラフルな色づかいがアメリカ人たちの心をつかんだのだとも言えよう。しかし、戦後当時の製品はいくら色つきだったといっても、現在のものほど鮮やかではなく、素朴な色づかいで、全部で 4 色くらいだったと、琉球ガラス村の職人の方はおっしゃっていた。また、高良（1990）も、「琉球ガラスに、ひとつの特徴として色がつくようになったのは戦後のことで、しかも、原色に近い鮮やかな色彩に変わってきたのは、ごく最近のことである。終戦後の空瓶ガラスを再溶融する方法で、ガラス製品を造っていた頃の着色は、すでに色のついた瓶を、溶け合わせるやりかたであった。だから、色はくすんだ感じになり、現在のような鮮やかさはなかった」と、述べている。

今まで述べてきたように、琉球ガラスは米軍兵士たちからの需要や要望にこたえていくことで、また、彼らが排出する色つきの廃瓶が材料として使われるようになったことで、大きく進化することとなったが、このように琉球ガラスは彼らのライフスタイルや好みに合わせていくというかたちで発展していったと考えられる。つまり、西洋美の影響を受けていることになるが、これが琉球ガラスが他の沖縄の伝統工芸と違うところである。

３.３　本土への復帰、沖縄海洋博覧会後の変遷

「1971（ママ）年の本土復帰以前は、琉球ガラス製品の６割がアメリカへ、２割が日本本土へ輸出されていた。残りの２割が地元で販売されていたことになるが、そのほとんどを米軍関係者が購入していたといわれる。つまり、製品の８割はアメリカ人に販売されていたことになる。」（天空企画 2002）、「昭和 47 年以前（復帰前）のガラス製品はその生産の 60％を米国に、20％を本土に輸出し、残りの 20％が島内で販売されましたが、顧客のほとんどが米国駐留軍人でした」（ウェブサイト「那覇市伝統工芸館」）とあるが、1975 年に沖縄海洋博が開かれ、沖縄が観光地として注目されるようになると、この構図に変化が現れる。

観光地として本土などから観光客が訪れるようになると、今度は琉球ガラスは観光客から脚光を浴びることとなった。沖縄のみやげ物として注目されるようになった琉球ガラスは、みやげ物としての性格を帯びるようになり、デザインを改良したり、製品の種類も増やしたりして（各種グラス、食器、インテリア小物など）、こういったことが功を奏したのか、本土の人にも琉球ガラスは受け入れられていった。

当時のことを知る琉球ガラス村の職人の方の話によると、本土復帰に際して、職人たちは不安を抱えていたという。本土の人に琉球ガラスは受け入れてもらえるのかと、職人たちは思っていて、物価が安かった当時、琉球ガラスは裕福なアメリカ人を主な相手として商売していたために、琉球ガラス＝高価というイメージがあったという。

しかしながら、ふたを開けてみればデザインの改良や製品の種類の充実など、職人の方々の努力や工夫もあって、本土の人にも琉球ガラスは多く消費されるようになった。

４．琉球ガラスの現在とこれから

戦前、戦後の頃から比べると、琉球ガラスはいくつかの転機を経て、様々な面で変化してきた。

例えば､琉球ガラスは本来､廃瓶を再利用して製品を作るというスタイルだったが、現在では多くのところが原料ガラスから製品を作っている。そのほうが廃瓶で作るよりも色鮮やかな製品ができるという。しかし、読谷村にある「宙吹きガラス工房　虹」では、現在でもすべての製品を廃瓶から作っているという。ペプシなどに頼んで、廃瓶がたまったらもらいに行くのだそうだ。ペプシ側からすれば、廃瓶を処分するとなるとお金がかかるので、もらっていってくれるのは助かることだし、工房にとっては材料が調達できるから助かるし、お互いに都合がいいようになっている。また、那覇市の奥原硝子製造所でも、創業以来ずっと廃瓶を利用しているという。このように、原料ガラスを使うことのほうがメジャーになった現在でも、こだわりを持って昔ながらの廃瓶から作るというスタイルを継続している工房もある。

また、本土復帰前は製品の 6 割をアメリカに向けて輸出し、沖縄で販売していた 2 割も、ほとんどが米軍関係者が買っていた、琉球ガラスはアメリカ人たちに大量に消費されていた、と先に述べたが、現在では沖縄で生産した製品を、海外に向けて輸出するという話は聞かなかった｡琉球ガラス村では現在輸出はしていないという｡また、奥原硝子製造所でも、沖縄の米軍のフェスティバルなどがあればそれに出品したりはするが、輸出はほとんどしていないという話を聞くことができた。それだけ本土の人たちに受け入れられ、みやげ物として定着したことが大きく関係しているのではないかと考えられる。

平成になると、沖縄県が 1998 年に琉球ガラスを伝統工芸品に認定し、現在、沖縄県にはガラス工場が 18 ヶ所ある。また、大城孝栄氏、稲嶺盛吉氏、桃原正男氏の 3 人の職人の方が、現代の名工に指定されている。

今後琉球ガラスをどう発展させていきたいかという話を何人かの職人の方に伺ったところ、みやげ物としての琉球ガラスとしてだけではなく（おみやげだからという理由で琉球ガラスを買うのではなく)、ぜひ琉球ガラスだからという理由で選んで、食器として使ってほしいという職人の方もいれば、タイル・板ガラスなど、建築業などにも使えるように発展させていきたいとおっしゃっていた職人の方が、琉球ガラス村にはいらっしゃった。実際に、琉球ガラス村の建物の表面は、ガラスで作られたタイルで装飾されていた（写真２・３)。また、どうやって手を休めずに働いていくか、前進していくか、常に新しいものを開発しているか、いないかが、その工房が生きているか死んでいるかの違いだと思う。とおっしゃっていた職人の方もいらした。

写真2　ガラスで装飾された琉球ガラス村の様子

写真3　壁面にはガラスによってアートも施されている

伝統工芸といえば後継者問題がよく取り上げられると思うが、琉球ガラスにおいては、その心配はないという。沖縄県内だけでなく、本土からも若い人たちが来て技術を学ぼうとするため、琉球ガラスは後継者問題に関しては全く心配ないそうだ。色鮮

やかで、泡やひびが入っているという手作りのぬくもりを感じさせるガラス自体の魅力とともに、沖縄が持つ自然の美しさ、人々の温かさも本土から若者たちを沖縄へ、そして琉球ガラス産業へといざなう大きな理由であろう。

５．琉球ガラス産業が抱える問題

このように見てくると、琉球ガラスは今まで順調に成長を遂げてきて、これからもさらなる発展をしていくかのように考えられるのだが、問題がないわけではない。平成になると海外（ベトナム）にも琉球ガラスの工場ができて、そこから輸入される製品が、県産品の立場をおびやかしているという事実がある。これは琉球ガラスに限らず、他の沖縄の伝統工芸品でも言えることだという。

海外の安い人件費で作られた製品は、当然国内で作られたものに比べて安価だが、それが海外で作ったものと表記されずに販売されていたり、小売店もそれを知らないこともあるという。また、仮に知っていた場合でも、国内産だと偽って販売しているケースさえあるそうだ。そうしたほうが、もうけが大きいからだという。海外で作った製品には海外製だというシールを貼ったりして、沖縄で作られた琉球ガラスとは区別できるようにしているというが､すべてがそうやって区別されているわけではない、というのが事実としてあるという。

私は、海外で作られた安価な製品が国内に輸入され、それが販売されていることについてどう思うかということを、何人かの職人の方に伺ったが、海外で作られた安い製品が国内に輸入され出回ることで、沖縄県内の職人たちは危機感を抱いており、また、産地を偽るような行為は許せないといった話や、ガラスに限らず海外で作ったものを沖縄で作った工芸品として売られているという事実があるというのは、沖縄県全体の危機だという話も伺った。また、食品などは産地表記をはっきりしているのに、工芸品はそのへんがあいまいなので、今後はしっかり改善していかなければならないという話も耳にすることができた。

そして､(海外で作られた）安いガラス製品を買って、割れたらまた新しいものを買えばいいという、そういった考え方ではなく、ちゃんとしたものを買って大切に使ってほしい。ものを大切にすることが命を大切にすることにつながるのではないか。と語っていた職人の方もいらして、その話にはとても感心した。

海外で作られた安価な製品は、職人とか、こだわりを持った人が見ると仕事が雑に感じるという話を聞いたが、その一方、国内で職人が作ったものと区別しにくいという話も聞くことができた。海外で琉球ガラスの製造に携わる外国人の職人も、今後どんどん技術を高めていくだろうし､そうなれば国内産と区別するのは､(シールなどを貼ったりしてきちんと区別されなければ)より困難になっていくのではないだろうか。

海外で作られた安価な製品が大量に輸入されているという事実を知ってほしいと語っていた職人の方もいた。

これまで述べてきた問題のひとつの対処策として、2006 年 8 月に「沖縄産工芸品

販売推進協議会」というものが設立された。これは、沖縄伝統工芸品の模造品対策を協議するもので、安値で生産され、販売される外国製の沖縄工芸品の対策を考え、原産地表示の徹底や、模造品の排除などを進めるという。

今までは、海外に工場があることに対して否定的なことばかりを述べてきたが、海外に工場があることに対して、肯定的な意見も伺うことができたので、その話も紹介したい。

私は、琉球ガラスは沖縄の伝統工芸品だが、やはりそうである以上、沖縄県内で職人が作るべきだと思うか。という問いや、伝統工芸（品）とは、国内の職人が守り、受け継ぎ、国内の限られた技術者だけが、特別な技術（能力）を継承していくものだと思うのだが、それは伝統工芸（品）を神秘化しているのか。といった問いをひとりの職人の方にぶつけてみた。その問いに対して、本来は沖縄県内で作るべきだが、琉球ガラスをもっと産業化して、世界に送り出していくためには、沖縄の職人だけでは生産が追いつかず、最もよく売れるグラスなどを海外の工場が作ってくれることで、沖縄県内の職人は、他の、もっと芸術性の高い、高度な技術を必要とする作品を作ることに時間を費やすことができるので助かるし、結果的に琉球ガラスは（産業として）伸びている。という話をその職人の方は聞かせてくださった。

また、海外に工場があれば、海外に市場を開拓するのが容易になるだろうし、現に、ベトナムにある工場では、ベトナムを訪れる欧米人観光客をターゲットにしているという。琉球ガラスを海外の人に知ってもらい、琉球ガラスを世界に向けてアピールしていくためには、海外に工場を持つというのは、ひとつの手段として有効だし、納得のいく話である。

海外に工場があるということに関しては、良い一面もあれば、悪い一面もあると言えよう。

しかしながら、海外で作った安価な製品を沖縄県産だと偽って販売することは許されることではないと思う。それは、沖縄や、沖縄の伝統工芸に対しての信頼を失うことにつながるからだ。また、そういった行為は、観光客などの消費者を裏切る行為にもなってしまう。

今後、この「沖縄産工芸品販売推進協議会」ができたことによって、琉球ガラスに限らず、沖縄の伝統工芸がどういった道を歩んでいくことになるのかが、注目される。

６．伝統工芸とは

その歴史は 100 年ほどと、伝統工芸と呼ぶにはまだ浅いかもしれないが、琉球ガラスは今や沖縄を代表する工芸品、みやげ物としての地位を築き、人々に広く認知されたことだろう。

伝統工芸である以上、製品はすべて沖縄で現地の職人たちの手によって作られているものだと私は思っていたし、琉球ガラスを沖縄へ行ったみやげ物として購入していく人たちも皆、それが当たり前だということを前提として買い求めているのだと思う。

私は先に、琉球ガラスは沖縄の伝統工芸品だが、やはりそうである以上、沖縄県内で職人が作るべきだと思うか。という問いや、伝統工芸（品）とは、国内の職人が守り、受け継ぎ、国内の限られた技術者だけが、特別な技術（能力）を継承していくものだと思うのだが、それは伝統工芸品を神秘化しているのか。という問いを職人の方にぶつけてみたと述べたが、これは伝統工芸に対して一般の人が抱えているイメージ、考え方を代表して聞いた質問に相当するのではないかと私は思う。しかし、実際には海外にも工場があり、そこでは現地の人たちが製品の製作に携わっているという事実があった。これをショックと受け止めるか、当たり前のこととして受け止めるのかは、人によって違うと思うが、私にとってはイメージが崩されたということでショックだった。

しかしながら、伝統工芸の現実とはこんなものなのかもしれない。100 円ショップに足を運べば、有田焼や会津塗といった、琉球ガラスよりも長い歴史を持つ伝統工芸品が、たったの 100 円で売られている。だが、その現実を目にして、この状況を嘆く人はどれだけいるのだろうか。むしろ、たったの 100 円でこれらの伝統工芸品を手にすることに対する満足感を抱く人の方が多いに違いない。

金をもうけることやビジネスといったことを考えた場合、伝統工芸とは現地の人が守り、継承しなければならない、などというそんな悠長なことは言っていられないのだと思う。生産コストを下げ、大量に作るためには、海外に労働力を求めるのは自然な発想だし、伝統工芸というものをこれからの世に残していくためには、金儲けやビジネスといった手段を使わざるを得ないのかもしれない。現地の職人たちだけが製品の製作に携わるというのは、伝統を守るという意味では一番の方法かもしれない。しかし、そうして出来上がった製品は値段も高く、数も少ないだろう。こういったやり方では、伝統を守ることとは引き換えに、一般の人たちが伝統工芸に触れる機会はほとんど限られてしまい、伝統工芸を身近に感じることはできないだろう。

だが、有田焼や会津塗の場合も同じだと思うが、琉球ガラスの工場を海外に建設し、そこで安価な製品を大量に作れば、それは本当の意味で伝統工芸品とは呼べないかもしれないが、私たちは少ない出費で伝統工芸というものを身近に感じる機会に恵まれるのである。こういったことから、海外での工場の建設、安価な製品の大量生産というのも、一概に否定することはできないのではないだろうか。

伝統工芸を残していくためには、多くの人たちがそれを生活の中に取り入れ、その存在を身近に感じることが不可欠だと思う。そういった意味では、海外で安価に作られた製品は、その役割を十分に果たしうるのではないかと思う。伝統工芸を私たちが身近に感じることができるようになることが、伝統工芸の保存には必要だと考える。

伝統工芸を身近に感じるためには、安価な製品の存在が必要であるし、そのためには海外に安い労働力を求め、大量生産することもまた必要だ。伝統工芸の保存にビジネスを活用する。こういった考え方は、現地で伝統工芸の保存に関わる人たちや、彼らが生み出す製品を脅かしかねないが、その一方、伝統工芸の灯火を消さないために

も必要な考え方なのではないかということを述べたい。

７．おわりに

琉球ガラスの発展には、駐留米軍の存在が大きく関わっていると知ったとき、沖縄の文化はいろいろな文化が混ぜ合わされることでできた、チャンプルー文化であるという話を思い出し、これもその一例なのではないかと思った。

私は今回のフィールドワークで何件かのガラス工房を訪れ、そこで働く何人かの職人の方に話を伺うことができた。また、工房に並ぶガラス製品はどれも美しく、自分が今沖縄にいるということを強烈に印象づけてくれたし、ひとつひとつのガラス製品が持つ輝きは、確かにどれも西洋美の影響を受けていると思わせるような、日本的な美とは違う美しさをまとっていたように思う。

ガラスと向き合う職人の方々、特に年配の職人の方というのは、非常に真剣な目つきでガラスと向き合っており、プロとしてのプライドが感じられ、沖縄の伝統の担い手であるその人たちは、昔気質な雰囲気をただよわせていた。

海外にも琉球ガラスの工場があり、そこで生産される製品が沖縄産の製品と、沖縄の職人の存在をおびやかしているという事実は、実際に現地で調査をして分かったことであり、私が調査に行くまでに目を通した文献やホームページには、琉球ガラスは伝統工芸といえばよく問題視されるであろう後継者問題に関しても心配ないということが記されていたので、琉球ガラス産業はすべてが順風満帆であると思っていた。

しかし実際には琉球ガラス産業はこんなにも大きな問題を抱えていたし、それには驚いたし、これはまた新しい発見でもあった。

伝統工芸がおかれている状況というのは、琉球ガラスに限らずみな厳しいものであると思う。だから、何も手を打たないままでは衰退していき、やがては消えてしまうかもしれない。昔から受け継がれてきた伝統工芸というものは今後にも残していく必要があると思うし、そのためには守るべきものは守るのと同時に、変えていくべき点は変えていく努力や工夫も必要だと思う。危機に瀕しているにも関わらず、大した手立ても講じないまま伝統工芸を絶やすようなことがあれば、それは実に惜しいことだと思う。若い人たちが本土から琉球ガラスを学びにやって来るというのは、伝統工芸を守るうえではとてもいいことだと思うし、そうやって若者が関心を持つことが、伝統工芸を守っていくためのひとつの手段かもしれない。

参考文献

井上暁子（2003）『産地別　すぐわかる　ガラスの見分け方〔改討版〕』東京美術
天空企画（2002）『図説　琉球の伝統工芸』河出書房新社
稲嶺盛吉（1998）『炎　琉球ガラスの美と技　稲嶺盛吉作品集』沖縄タイムス社
岡信孝（1995）『古美術に想う』芸艸堂
高良松一（1989）「琉球ガラス工芸の文化」『沖縄県立博物館紀要』第 15 号
ーーーー（1990）「琉球ガラス工芸の文化〔Ⅱ〕」『沖縄県立博物館紀要』第 16 号

参考ウェブサイト

「沖縄情報マガジンてぃだ」
http://www.okinawakouhoucenter.co.jp/ichimyo_box/kouensyuu/0405.html
「沖縄タイムス」
http://www.okinawatimes.co.jp/eco/20060209_3.html
http://www.okinawatimes.co.jp/eco/20060318_2.html
http://www.okinawatimes.co.jp/eco/20060802_2.html
http://www.okinawatimes.co.jp/eco/20060822_1.html
「シャトーヒルズ株式会社」
http://www.smrj.go.jp/keiei/kokurepo/case/backnumber/007123.html
「那覇市伝統工芸館」
http://www.kogeikan.jp/history/h_glass.html
「名工が語る琉球ガラスの世界」
http://www.wonder-okinawa.jp/009/index.html
「琉球ガラス専門店るりあん」
http://www.rurian.co.jp/story/
「琉球新報」
http://www.ryukyusimpo.jp/news/storyid-16155-storytopic-4.html
http://www.ryukyusimpo.jp/news/storyid-16521-storytopic-4.html
「e-awamori 泡盛横丁」
http://www.e-awamori.co.jp/topics/yantaku/garasu.html
「工房花時・琉球ガラス」
http://www.mco.ne.jp/~hanatoki/ryukyuglass.htm